



Osaka Gakuin University Repository

Title	suddenly 考 (2) On <i>suddenly</i> : Part 2
Author(s)	黒宮 公彦 (Kimihiko Kuromiya)
Citation	大阪学院大学 外国語論集 (OSAKA GAKUIN UNIVERSITY FOREIGN LINGUISTIC AND LITERARY STUDIES), 第 73 号 : 49-64
Issue Date	2017.6.30
Resource Type	Article/ 論説
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

suddenly 考 (2)

黒宮 公彦

1

黒宮 (2016) に引き続き、**suddenly** には「状態変化が突然であること」を表す場合と「認識の変化が突然であること」を表す場合の2つの用法があるという仮説を検証していく。そのために **be** と **suddenly** が共起している文における **suddenly** の振る舞いについて、**British National Corpus** (以下 **BNC** と略記する) を使ってランダムに抽出した578例¹ を対象に調査する。

2

黒宮 (2016) の繰り返しになるが、578例中 **suddenly** が実際に **be** を修飾していたのは239例のみだった。このうち **suddenly** が < **be** + 形容詞 > を修飾している73例については黒宮 (2016) ですでに詳しく見た。本稿では **suddenly** が進行形を修飾しているものについて考察を加えることにしたい。

suddenly が **be** を修飾している239例中、進行形、すなわち < **be** -ing > を修飾していたのは29例だった。さらにこれ以外に進行受動形の例も2例ではあるが見られ²、これらも含めると計31例となる。予想外に多いというのが筆者の率直な感想である。

黒宮 (2016) で触れたとおり、動詞の完結相と非完結相³ とが形態上区別される言語においては、一部の動詞、とりわけ状態動詞の完結相が起動相を示すことがあり、英語もこうした言語に該当すると **Comrie** (1976:19-20) は述べている。進行形は基本的に非完結相を示すのであるから状態動詞と似た性質を

有している。それが突然の状態変化を含意する **suddenly** とともに用いられると、状態動詞の完結形と同様、起動相、すなわちある状態から他の状態への移行（の開始）を示すと考えられる。つまり状態変化が生じているわけであるが、< **be suddenly** + 形容詞 > の場合と同様、< **be suddenly -ing** > の例についても「物理的な状態変化が突然であること」を表す場合と「認識の変化が突然であること」を表す場合とがあるように見受けられ、しかもどちらなのか判断のつきにくいものが多い。

- (1) a. He was glaring at me suddenly. (BNC: CEX)
 b. And suddenly, too, her brain was whirring. (BNC: H97)
 c. How could she not like it? ‘It’s a terrific idea!’ Suddenly Lisa was grinning from ear to ear. And suddenly, too, her brain was whirring. ‘I’ll do some additional designs for the special collection. We’ll need a few more to fill it out.’ (*ibid.*)
 d. [S]uddenly he was shouting in her ear. (BNC: F9X)
 e. At first he sounded distant, as if he was calling to her from the basement of a big house, but he came nearer very quickly and suddenly he was shouting in her ear. (*ibid.*)

(1a) では「彼が私をにらむ」という変化が突然起こったのだろう。しかも“**He suddenly glared at me.**”ではないのだから「彼が私をにらむ」状態がしばらく続いたことをも示唆している。要するに「彼は急に私をにらみだした」という日本語に相当するのだろう。しかし「彼が私をにらんでいることに突然気づいた」という可能性も否定できない。

(1b) の文意は明確でないので前後の文脈を確認したところ (1c) のようなものだった⁴。(1c) を見ても **whir** の意味ははっきりしないが、比喩表現であることは間違いなく、おそらくは「モーター音のような低く唸る音を立てる」

といったところだろうから、「頭脳が急にモーター音を立て始めた」、つまり「突然頭脳が回転し始めた」という意味だろう。要するにこの *whir* は「実際に、物理的に音を出す」ことを表すのではなく比喩なのであるから、そのような変化が突然生じるものなのかどうか判断するのは難しい。それまで働いていなかった頭脳が急に回り出したように感じることはあり得るようにも思うが、そのような場合というのは得てして、頭脳が動き出して少しした後によく「あ、今頭が働いている」と認識するに至る、ということが多いようにも思う⁵。

この、「物理的变化」と「認識の変化」のいずれが突然生じたのかという問題を考えるために (1d, e) を見てみよう。(1d) だけを見ると「彼が彼女の耳元で叫ぶ」という変化が突然起こり、しかもその状態がしばらく続いた、ということを表しているように思われる。誰かが耳元で叫んだらその瞬間に気づくだろうから「彼女は自分の耳元で彼が叫んでいることに（最初は気づかなかったが）突然気づいた」というのは不自然だ。ところが (1d) は実は (1e) の一部であり、(1e) 全体を読んで (1d) の先行文脈を確認すると「彼女は自分の耳元で彼が叫んでいることに突然気づいた」という解釈で正しいことが分かる。彼女には彼の声が初めから聞こえていた。ただ最初は声は遠くから聞こえた。ところが声は急に近付いてきて、いつの間にか彼女のすぐそばから大声が聞こえるようになっていた、ということなのである。

ここから重要なことが分かる。*suddenly* は「突然、急に」という意味もさることながら「いつの間にか」というニュアンスも含んでいるということだ。とりわけ < *was* [*were*] -ing > と共起した場合には、主語が意図的に行える動作については「思わず～していた」、そうでないものについては「いつの間にか（ふと気づくと）～していた」という日本語がぴったりくるものが多い。こうした文について、「物理的变化」と「認識の変化」のいずれが突然生じたのかという問いにはあまり意味がない。物理的变化が生じた直後にそれを認識したのであれば物理的变化が突然生じたという解釈になろうし、物理的变化が起きてしばらく後にそれを認識したのであれば認識の変化が突然生じたというこ

とになろう。しかし実際にはこの違いが意識されていると思えないような文が多い。より正確には、物理的変化がいつ生じたのが意識されておらず、それよりもその変化に主語（または話し手）が今気づいたことに焦点が当てられている文が多い。これはつまり、認識の変化が突然生じたことを表している文だということになる。

これと関連して興味深い事実がある。suddenly が < be -ing > を修飾している29例中、他動詞が用いられていた（すなわち suddenly が < be V_i-ing > を修飾していた）のはわずかに2例で、残りの27例では自動詞（すなわち < be V_i-ing > を修飾していた）が用いられていたのである。他動詞は基本的に意図的に行う動作を表すのだから、suddenly が < be V-ing > を修飾している場合、動詞 V が意図的に行う動作であることは多くないと予想される。もちろん自動詞だからと言って意図的に行えない動作だとは限らない—むしろ意図的に行う動作を表す自動詞も多い—が、それでも明らかに自動詞に偏っている点は興味深い。

ここでもう一つ重要なことを指摘しておきたい。それは < be -ing > が果たす役割についてである。< be -ing > は通常進行相、すなわち非完結相を示す。これは動作の開始時点や終了時点を意識せず、多くの場合は動作の途中の部分で「状態」として眺めるアスペクトである。言い換えると < be -ing > は基本的に「ある時点で動作が開始し、その後その動作がしばらく継続した」という「動作の継続状態」に焦点が当てられていると考えられる。さらに言うると < be -ing > は多くの場合「動作の継続状態」に加えて「動作の終了時点を意識しないこと」に重きが置かれ、これにより「動作の終了」を明示する完結相と対立するアスペクトを提示する役割を果たす。これに対し suddenly が < be -ing > を修飾している場合は「動作の継続状態」に加え、「ある時点で動作が開始したことは間違いないが、その開始時点の主語（または話し手）は認識していない」という「動作の開始時点に対する認識の欠落」にも焦点が当たっているように感じられる。非完結相は「動作の開始時点を意識しないアスペク

ト」でもあるのだから、この点が非完結相が選ばれている理由の一つなのではないだろうか。この点をより詳しく見るために、次の(2)について考えてみよう。

(2) Suddenly I was jumping, yelling out as the flagstone beat my feet like a cudgel or stone cricket bat. (BNC: G02)

< be -ing >は、動作を行っている状態が少なくともある程度は持続できるような動詞に用いられる場合には進行相を表すが、jump は一瞬で完了する動作を表すので“be jumping”は反復相 (iterative)、すなわち「何度も繰り返し跳ぶ状態」を表すのがふつうである。では(2)のIは「何度も繰り返し跳んだ」のだろうか。

この点について英語の母語話者2名（1名はイギリス人、もう1名はアメリカ人。因みに(2)はイギリスの小説から採られたものである）に質問してみた⁶。アメリカ人母語話者の回答は以下のようなものだった。「一度跳んだだけだったら“I jumped”と表現するだろう。それが“I was jumping”となっているのだからおそらく何度も繰り返し跳んだのだろう。これが suddenly で修飾されているのは少し奇妙な感じだが、『それまでの、跳びはねていなかった状態』から『繰り返し跳ぶ状態』への変化が突然だったということだろう。それに、繰り返し跳んだにせよその状態は短時間で終わった、という含みもあるのかもしれない。そういう理由から“suddenly I was jumping”と表現されたのだろう」。一方イギリス人母語話者の回答は「繰り返し跳んだのかもしれないし、一度跳んだだけかもしれない。どちらもあり得て、はっきりしない」というものだった。

ここから(2)の“was jumping”は「何度も繰り返し跳んだ」「一度だけ跳んだ」のいずれの解釈もあり得ると言ってよいと考えられる。そしてそれは日本語の次のような現象と似たものなのではないか。すなわち「落とす」のような

一瞬で完了する動作を表す動詞がテイル形（「落とす」ならば「落としている」）になると、(3a)に見るように反復相を表すのがふつうである。ところが「思わず」「我知らず」といった副詞相当語句と共起すると一度きりの動作を表しているという解釈も可能となる。(3c)の「殴っていた」は「一度だけ」「何度も」のいずれの解釈もあり得るだろうが、(3b)の「落としていた」はおそらく「一度だけ」の解釈に限定されるだろう。

- (3) a. 年の瀬の寺では僧侶たちが仏像のほこりを落としていた。
b. 衝撃的なニュースに私は思わず手に持ったかばんを落としていた。
c. 私は思わず友人を殴っていた。

ここで、「一度だけ」と「何ども」のいずれの解釈が正しいのかというのはさして重要なことではない。その動作が一度だけ行われたのか、それとも何ども繰り返されたのかは文脈にもよるし、それに何よりも文の表す事態の自然さに依存する。例えば(3b)であれば、ある人がかばんを手にしていて、そのかばんの数は1つと複数のどちらがより普通の、頻度の高いことであるか、あるいは複数のかばんを手をしている人が何かに驚いてかばんを取り落とすとして、複数のかばんを次々と落とすというのはどれくらい自然なことであるのか、といったことから総合的に判断した結果(3b)の「落としていた」は「一度だけ」の可能性が高いという結論が導かれるのだと考えられる。しかもそうした常識や文脈を加味しても「一度だけ」と「何ども」のいずれかに特定されず、いずれの解釈もあり得るという場合が多い。例えば「殴っていた」は文脈がなければ「何度か殴った」と解釈するのが自然であるから(3c)のような文であってもどちらかと言えば「何度か殴った」の意味で解釈される傾向があるかもしれない。しかし少なくとも筆者の感覚からすると「一度だけ殴った」という解釈も十分に成り立つと思われる。両者のうちのいずれか一方に決めることはおそらくできないし、どちらかが正しいのかは重要なこととは思わ

れない。

それよりも重要なのは「思わず」が動作主の非意図性を明示し、それが非完結相を示すテイル形と共起することにより、すでに述べたとおり、「動作の開始時点に対する認識の欠落」が注目される、言い換えると「いつ始めたのか記憶にないが、気づいたらその動作を行っている状況の中にいた」という含意が生じるということである。これは「動作の開始時点」と「すでに動作が始まっていることを認識した時点」とにずれがあり、その上で後者に焦点を当てることを意味するから、黒宮 (2016) や本稿で議論してきた「状態変化」と「認識の変化」の区別という観点から眺めると後者、すなわち「認識の変化」を表している例だと言える。

日本語のこの「思わず～していた」という表現が < was [were] suddenly -ing > と似ていることはすでに指摘した通りだ。ここから類推して < was [were] suddenly -ing > にもこの日本語表現の持つ諸特徴が当てはまるのではないだろうか。< be -ing > は「動作の継続状態」に加え「動作の開始時点に対する認識の欠落」に焦点を当てる。もちろん「動作の継続状態」も含意されるのだから動詞が一瞬で完了する動作を表す場合には反復相だと解釈されやすい (上記アメリカ人母語話者のコメントを参照) が、必ずしも反復相だと解釈されなければならないわけでもない (上記イギリス人母語話者のコメントを参照)。いずれにせよ重要なのは「動作の開始時点は記憶にない」「気づいたら動作の継続状態の中にいた」ということに焦点が当てられている点で、これは明らかに「状態変化よりはむしろ認識の変化が突然であること」を示していると言える。

ここで反復相の解釈に関連して、アメリカ人母語話者から「一度跳んだだけだったら “I jumped” と表現するだろう」というコメントが寄せられたことについて改めて考えてみよう。

(4) a. He was glaring at me suddenly. (= (1a))

- b. He glared at me suddenly.
- c. Suddenly I was jumping. (cf. (2))
- d. Suddenly I jumped.

(4b) は単に「彼は急に私をにらんだ」ということだろう。それと比べると(4a)は「彼は急に私をにらみだした」、つまり「その状態はその後もしばらく続いた」という含みがあるものと思われる。それと同じように(4c)には「しばらく跳ぶ状態が続いた」という含みがあると考えるのは自然であり、他方 jump は glare と異なり一瞬で完了する動作を表すので反復相だと解釈するわけである。これがもし一度跳んだだけなら(4d)のように表現されるはずだというのは納得のいく説明である。しかしイギリス人母語話者のコメントに従えば(4c)を「一度跳んだだけ」と解釈することも可能だという。ではその場合(4d)との違いは何なのだろうか。

ここで思い出されるのは Comrie (1976:4) の次の一節である。

(5) Another way of explaining the difference between perfective and imperfective meaning is to say that the perfective looks at the situation from outside, without necessarily distinguishing any of the internal structure of the situation, whereas the imperfective looks at the situation from inside[.]

完結相は状況を外側から、客観的に眺める。(4d)の主語は一人称だが、それでも「跳び上がった私」とは別に「その状況を客観的に眺めている私」がいて、後者の視点からの表現が(4d)だと言える。jump は jump であって内部構造を持たない。開始から終了までが一つのものとして捉えられている。完結相はそのような認識を示す。

他方非完結相は状況を内側から、主観的に眺める。(4c)の原文は(2)であり、それによると足に激痛が走って思わず跳び上がったという状況である。お

そらく「痛い」と認識するより先に身体が反射的に反応し跳び上がっていたのだろう、一瞬の後に認識が追いついたときには身体はすでに跳び上がっている状態にあったことを表現している。jump が「開始」「途中の状態」「終了」という内部構造を持ったものとして認識されており、かつ、開始の時点は認識されていないこと、気づいたら跳び上がっている状態にあったことが示されている。このような動作主の主観的な認識を表現できるのは非完結相ならではだと言えよう。

以上から次のことが言えるのではないかと予想される。すなわち、動詞が表す動作を客観的に眺めるのであれば < be -ing > は、たとえ suddenly とともに用いられようとも、動作中の状態がある程度持続したことを表さねばならない。結果として、jump のように一瞬で完了する動作を表す動詞の場合の進行形 be jumping は反復相を表していることになる。他方、動詞が表す動作を書き手が動作主の立場に立って主観的に眺め、読者もまたそのような捉え方を受け入れるのであれば、< be suddenly -ing > は「動作の開始時点を認識していないこと」を強調する。結果として動作中の状態が持続したことを表す必要はなく、jump のように一瞬で完了する動作を表す動詞の場合であっても「動作が一度だけ行われた」という解釈を許容する。2人の母語話者の解釈のずれはこのように説明できるようではないだろうか。

このように < be suddenly -ing > は「認識の変化が突然であること」、つまり「すでに生じていた状態変化に突然気づくこと」を表すことが多いと言える。もっともこの用法も、上記の議論から（以下、状態変化を認識する人を「認識者」と呼ぶことにすると）「認識者が動作主である場合」と「認識者が動作主でない場合」とに分けて考えた方がよさそう。ここに、すでに軽く触れたが、「動詞の表す動作が意図的に行われるものかどうか」という点も重要であるので加味してまとめると次のようになろう。

(6) a. 認識者が動作主で、動作が意図的に行われるものである場合

- b. 認識者が動作主で、動作が意図的に行われたいものである場合
- c. 認識者が動作主でなく、動作が意図的に行われるものである場合
- d. 認識者が動作主でなく、動作が意図的に行われたいものである場合

(6a) の場合 **suddenly** が共起することはほとんどないと思われる。誰かが何かを故意に行う場合、当人は意図的に、つまりあらかじめそれをしようと思った上で実行するのだから意外性はないはずであり、それを当人が「突然だ」と感じるというのはあまりにも不自然でありそうもないからである。強いて言えば誰かが突然何かをしようと思って、そう思った瞬間実行に移していた、という場合が該当するかもしれない。

(6b) の具体例が (4c) であるが、このような例は珍しい。「認識者が動作主である」ということは、ある人が何らかの行動を取ったが、当人はそれを意識しておらず、少し遅れて「我知らず」その行動をしていたことに突然気づいたということだから、具体例が少ないのも当然のことだ。

(6c, d) はいずれも「認識者が動作主でない場合」であるが、これは認識者の関与しないところで出来事が発生して状態変化が生じ、少し遅れて認識者が「いつの間にか」そのような状態変化が生じていたことに突然気づいたということだから、(6b) と比べこちらの方がはるかによくあることだと考えられる。また (6c) にせよ (6d) にせよ状態変化が認識者のあずかり知らぬところで発生しているという点で変わりはないため、認識者にとって両者の区別は重要ではないと言える。

では (6b) と (6d) との区別は明確かという点必ずしもそうではない。なぜなら主語が三人称であっても小説等では作者がその人物の内面から出来事を捉えて描くことがふつうにあるため、三人称の主語が動作主であり、かつ認識者でもあるということが十分にあり得るからである。しかもここに読者の解釈が加わると問題はさらに複雑化する。読者が事態を動作主の視点から捉える(言い換えると動作主が認識者だと捉える)か、あくまでも客観的に事態を眺

める（言い換えると物語の語り手が認識者だと捉える）かによって母語話者でも解釈に差が出ることは(2)ですでに確認したとおりだ。(2)の主語を **he** に変えたとしたら「何度も繰り返し跳んだ」という解釈の方が優勢になるだろうが、それでも「一度だけ」という解釈がまったくできなくなるわけでもないだろう。あるいは(1c)を例にとると、(1c)の表している状況を客観的に眺めれば「Lisaは突然ニヤニヤ笑いを始めた。頭も急に回りだした」と解釈されるが、Lisaの視点に立って「Lisaは思わずニヤニヤ笑いをしていた。頭もいつの間にか回り始めていた」と解釈することも可能であろう—とりわけLisaの頭脳が回転を始めたと認識するためには、読者は否応なくLisaの視点に立たねばならないのだから。結局(6b)と(6d)との区別はそれほどはっきりしたものではないと言える。それは言い換えると「物理的变化」と「認識の変化」のいずれが突然生じたのかに関する区別は多くの場合明確でないということの意味する。同時にまた、ニヤニヤ笑いや頭の回転がどこまで意図的に行えるものなのか—あるいは無意識にしてしまうのを意識によってどこまで止められるものなのか—を考えると、(6c)と(6d)との区別もはっきりしたものではないことが分かる。

逆に言うと、文章中に一人称代名詞が現れていたらそれは重要な手掛かりになる。読者は通常その人物の視点から事態を眺めるはずだからである。(2)で読者が動作主の視点から事態を捉え、「気づいたら跳び上がっていた」という解釈がしやすいのは動作主が一人称であるためである。一方(1a)も(2)と同様非完結相が用いられている文ではあるが、こちらは読者が動作主の視点に立って「彼は我知らずにらみつけていた」と解釈することはあり得ない。なぜなら(1a)では主語が **he** であり、加えて **glare at** の対象が **me** なのであるから、状況は否応なくこの一人称の人物の視点から捉えられることになる。つまり、すでに述べたように、「彼は急に私をにらみだした」(**suddenly** は主に物理的变化を表す)、「彼が私をにらんでいることに突然気づいた」(**suddenly** は主に認識の変化を表す)のいずれかだということになる。この場合おそらく前者

が適切だと思われるが、正しい解釈は結局のところは文脈による。「彼が私をにらむ前の状態」を「私」が見ていたのなら前者が正しいということになる。見ていない状態でふと「彼」を見たらにらんでいることに気づいた、という状況であれば後者が正しいということになる。

抽象的な議論が続いたので、ここで具体例をもう少し見ておこう。

- (7) a. She squirmed against me and suddenly we were kissing. (BNC: HR7)
 b. But suddenly in September everyone was talking about war.
 (BNC: G16)
 c. Her softened tone said she thought that this was very sweet of him, if a little unnecessary . . . and suddenly Tom himself was standing behind her and draping a light hand around her bare shoulders. (BNC: H9H)
 d. Suddenly the back of the Morris Minor is hanging over the cliff edge.
 (BNC: HRF)
 e. and suddenly she was listening for dogs (BNC: FU5)

(7a) は (6b) の例だと考えられるが、もしかすると (6a) の例だとも言えるかもしれない。しかし「突然その気になってキスしていた」というよりは「気がついたら二人はキスしていた」の方が自然な解釈のように思われる。換言すると she の方が積極的にキスをしてきた結果二人がキスをした状況を表しているように思われる。そしてもう一つ重要なことは、(7a) の非完結相は「キスしている状態の継続」よりも「いつキスを始めたか覚えていないこと」を強く示唆しているように感じられることである。つまり suddenly は物理的変化よりも認識の変化に重点が置かれていると言えよう。

(7b, c) は (6c) の例である。すでに見た (1a) も (6c) の例であるが、両者を比べると興味深い結果が得られる。(1a) ではおそらく「彼は急に私をにらみだした」という物理的変化の解釈が優勢だろうが、(7b) の suddenly は間

違わずに認識の変化を表している。(7b) の **everyone** は世間の人々ということだろうが、それぞれの人が戦争について語るのを同時に一斉に開始することは考えられないし、また一人の認識者がその全体を同時に知覚することも不可能だ。結局 (7b) は「気づいたらいつの間にか急に誰もかもが戦争の話をするようになっていた」という認識の変化を表した文だということになる。これは (7c) も同様だ。“**Tom himself was standing behind her**” というのは動作というよりはむしろ存在を表しており、これを **suddenly** が修飾しているということは「トムが自分の後ろに立っていることに彼女は突然気づいた」と、認識の変化として解釈すべきであろう。物理的变化が突然生じたという解釈は考えにくい。

(7d) は (6d) の例である。物理的变化・認識の変化のいずれの解釈も可能だろうが、どちらかという後者ではないだろうか。物理的变化、すなわち「**Morris Minor** (自動車の車名のような) の車体の後部が崖から突き出たぶら下がる」という変化が突然生じたとしたならば、その勢いそのまま車全体が崖から落下してしまうのではないか。したがって **Morris Minor** が崖からはみ出る変化はゆっくりとある程度時間を掛けて起こったのであって、**suddenly** は認識の変化、つまり「いつの間にか自動車が崖からぶら下がって落ちかけている状態であることに突然気づいた」ということを表しているのではないかとするのが筆者の考えである。

(7e) は詩の一節である。“**listening to dogs**” ではなく “**listening for dogs**” なのだから、犬の鳴き声が聞こえているわけではなく、「聞こえないかと耳を澄ます」ということだろう。「彼女は突然、犬の鳴き声を聞きたくて耳を傾けだした」と考えると (6c) の例で、おそらくこの解釈でいいのだろうが、「彼女は突然、犬の鳴き声が聞こえないかと耳を澄ませている自分に気づいた」という認識の変化もニュアンスとして含まれているのかもしれない。この場合は (6b) の例ということになる。

以上からも分かるように、**suddenly** が物理的变化・認識の変化のいずれを

表すかは文脈に大きく依存すると言える。また文によってはいずれの解釈もあり得るということは、すでに述べた(2)に対するイギリス人母語話者のコメントからも見て取れる。

3

本稿をまとめると以下のようになろう。すなわち、黒宮 (2016) で見た < be + 形容詞 > を修飾している **suddenly** と比べると、< be -ing > を修飾している **suddenly** の方が「認識の突然の変化」を表していると判断される例が多い。その原因の一端は < be -ing > が非完結相を表すことにあると考えられる。非完結相は一般的には「動作の継続状態」と「動作の終了時点を意識しないこと」とに重点が置かれるが、「動作の開始時点を意識しないこと」もその機能に含まれており、< be suddenly -ing > はこの側面を強調すると考えられる。そして動作の開始時点が意識されていないということは物理的変化の瞬間を知覚していないということであるから、「突然」生じたのは認識者による認識の変化だということになる。認識の変化を表す **suddenly** が < be suddenly -ing > に多く見られるのはこのためであろう。

もともと、逆に認識者が物理的変化の瞬間を知覚した場合には物理的変化・認識の変化のいずれもが生じるので、両者を厳密に区別することはできない。両者の区別は文脈にも大きく依存するし、また受け取る側が文の表している事態を客観的に眺めるか、それとも動作主の視点から事態を捉えて文意を解釈するかによっても違いが生じる。

(「suddenly 考 (3)」に続く)

注

- 1) この点については黒宮 (2016) を参照のこと。
- 2) これについては「suddenly 考 (3)」で取り上げる予定である。

- 3) 黒宮 (2016) (とりわけ注3) で触れたことの繰り返しになるが、ここでいう「完結相」「非完結相」とはそれぞれ *perfective*、*imperfective* のことである。「完了相」「未完了相」と呼ばれることもあるが本稿ではこの名称を採用する。
- 4) なお (1c) の引用箇所には (1b) に加えて “*Suddenly Lisa was grinning from ear to ear.*” という *suddenly* が < *be -ing* > を修飾している例が見られるが、こちらはランダムに抽出した578例には含まれていなかった。578例に含まれたのはあくまでも (1b) の箇所のみである。
- 5) 筆者は黒宮 (2016) の(12)で、状態変化を「物理的な状態変化」と「人間の内面における変化」とに分けることを提案したが、本稿のこの議論は黒宮 (2016) で述べた区別と関連している。「頭脳が回転し始める」というのは「人間の内面における変化」であるので、変化が生じた正確な時点を特定するのは困難なことがあると言える。
- 6) この点に関して、大阪学院大学の R.D. Logie 准教授および Jason A. White 講師にこの場をお借りして謝意を表したい。

引用文献

British National Corpus <http://www.natcorp.ox.ac.uk/>

参考文献

Comrie, Bernard (1976), *Aspect*, Cambridge: Cambridge University Press.

黒宮公彦 (2016)、「suddenly 考 (1)」、『大阪学院大学外国語論集』第72号、pp.1-17.

Vendler, Zeno (1967), “Verbs and Times”, in *Linguistics in Philosophy*, Ithaca, New York: Cornell University Press, pp.97-121.

On *suddenly*: Part 2

Kimihiko Kuromiya

This article proposes that the word *suddenly* has two senses, one which represents an instantaneous change of state, and the other describing a speaker's realization of a change of state that has already taken place before the utterance.

In Part 2 we will continue to verify the proposal above through observing some more sentences, taken from *the British National Corpus*, where *suddenly* modifies <be + Present Participle>.